THE CITY OF YOKOHAMA

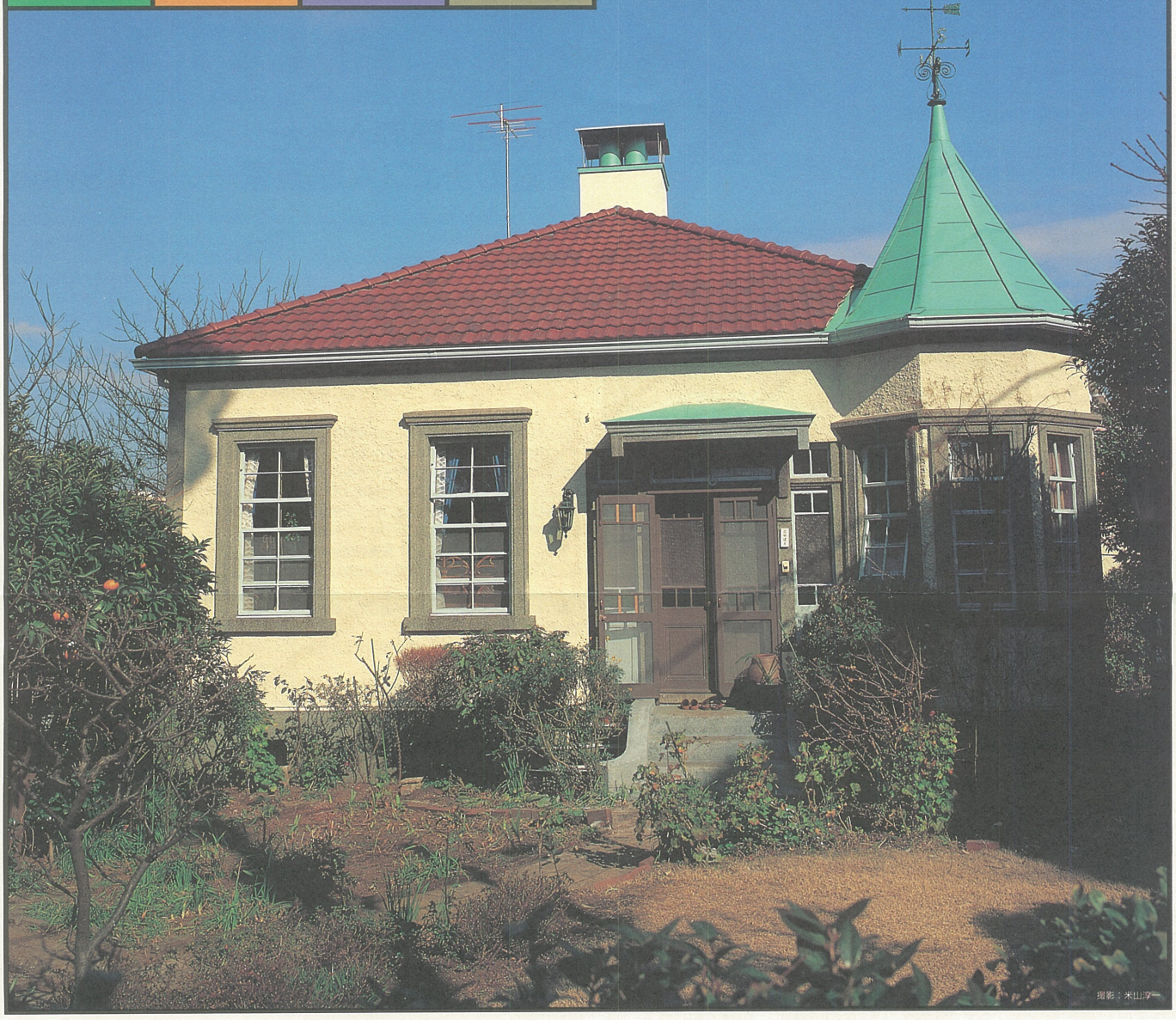
歴史を生かしたまちづくり

横濱新聞

第6号

平成3年（1991）3月16日発行

企画編集・発行／横浜市・横浜市歴史的資産調査会
事務局／横浜市都市計画局都市デザイン室内
〒231 横浜市中区港町1-1
TEL.045-671-3470 FAX.045-663-3415



風見の洋館

関 和明（関東学院大学助教授・横浜市歴史的資産調査会調査委員）

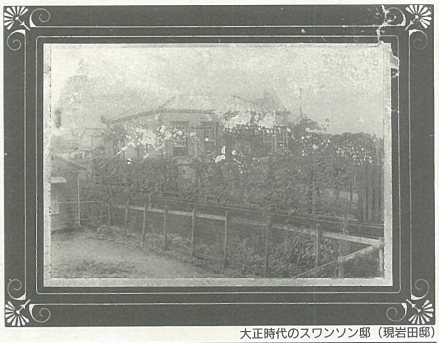
中区柏葉にある岩田邸は、大正のはじめに建てられた洋館である。木造の平家建てで、洋館としては、規模もさして大きくはなく、どちらかといえば質素な印象を受ける。しかし、むしろそれゆえに、洋館特有の、ロマンティックな雰囲気がことのほか強く感じられる。

この建物のある一帯は、住宅が密集して建ち並んでいるが、そのただなかに、10メートルを越えるユーカリの大樹がそびえ、そのまわりには、木々や草花、芝生で埋め尽くされた庭がぽっかりと開けている。そこが、岩田邸の敷地である。大きな寄せ棟型の屋根の中央には、暖炉のための煙突が四本突き出ているのが見えるが、これは、今回の修復で再現されたものである。玄関の横の八角形のサン・ルームと軽やかな風見を頂いた尖り屋根。都会にありながら、まるで田園のような静寂と暖かさに包まれ、時間が緩やかに流れている。それらは、歴史を経たものだけに与えられた、たたずまいを物語る。

この住宅を建てたのは、スワンソン氏というスウェーデン出身の人物で、海運の仕事をされていたという。そのご子息は、いまも横浜に住まわれている。この建物の古い写真を所有しておられ、かつては、屋根は瓦で葺かれ、外壁は板張りであったことが分り、修復に当って創建時の状態を推測するうえで大いに参考になった。

昭和30年代からここにお住まいの岩田氏も、この洋館に対する深い愛着と理解をお持ちである。そうした住まい手の意志に支えられてこそ、はじめて、古い建物とそれにまつわるたくさんのエピソードや記憶、物語すなわち歴史といったものの継承が可能になる。特に、この岩田邸のような、個人の住宅の場合は、なおさらであろう。

今回の保全修理によって、建物にまた新しい生命が吹き込まれ、更に建物の記憶のみならず、土地の記憶、人の記憶が積み重なっていくことになればと願っている。



大正時代のスワンソン邸（現岩田邸）

岩田邸（保全改修工事完成）

大正1（1912）年に建てられ、震災と戦災をくぐり抜けて、現存する貴重な洋館。八角形をしたサン・ルームと風見を載せた尖塔屋根、建物の中心にある4つの暖炉と煙突（今回の保全・改修によって復元）、豊かに植栽された庭園など、異国の生活文化が色濃く体現され、実感できる部分を随所に見ることができる。

NEWS

西洋館に息吹を与えた岩田夫妻

岩田邸を訪ねる時は、庭にある大きなユーカリの木が目印だ。庭にはよく手入れされている草花と果物の木が植えられている。岩田邸は一見した様子からだけからも、所有者に十分愛されていることが、うかがわれる。

岩田健夫氏(82歳)、ちゑ子夫人(79歳)が、大正元年に作られたこの洋館を購入したのは昭和34年のことである。購入当時は、この家には都市ガスも電話もなく、くもの巣がかかっている空家であったという。住み始めて間もなく、テレビや雑誌でも取り上げられることもあった。学識経験者の調査が行われ、横浜市を代表する歴史的建造物として、昭和63年度に登録、そして平成元年度に認定歴史的建造物となった。個人所有のものとしては初の事例である。偶然ですが、とても光栄ですと岩田氏は語る。

英国に度々出かけた岩田氏は、西洋の文化に詳しい。むこうの人々の生活と歴史的建造物にじかに接してきている。部屋に置かれている家具はどれも、この洋館に合ったものばかり。建主スワンソン家の遺品であるランタンも、岩田夫妻の彼らに対する敬愛の気持ちとともに、今も玄関に飾られている。

サンルームでとる毎日の朝食は、決まって洋風。テーブルの上のマーマレードは庭で取れた夏みかんを使ったちゑ子夫人の手作りの物。日あたりが良く健康的で住みやすく、お客さんもゆっくりくつろいでいくという。岩田夫妻にめぐり会えて、この洋館も幸福そうである。

Hummingbirds, the smallest flying birds, hover while feeding

居間でくつろぐ岩田夫妻

シビックトラストの実践者が来浜
――英国の港町ハリッジから

ハリッジ・ソサエティ事務局長A・ルター氏と幹事S・シアード氏が、昨年10月23日横浜市を訪問した。ハリッジ・ソサエティは、本紙3号で紹介した英国の環境保全団体シビックトラストに登録されている地域団体のひとつである。会員の西村幸夫東大助教授の招きで来日した。その日は関内周辺の歴史的建造物等を見学した後、横浜銀行協会で市内の環境保全グループと懇談した。

ハリッジは英国東部にある人口約16,000人の港町で、オランダ方面と結ぶ重要なフェリーの発着場だ。ハリッジ・ソサエティは1969年に設立され、現在の会員数は約900人、年会費は3ポンド(約750円)である。

A・ルター氏は税関職員で、ソサエティでの仕事はボランティアとして行っている。行政との関係、ユニークな募金方法、過去の実績、成果等が紹介された。

英国では、政府の歴史的建造物、記念物の保全活動は大きなものを対象にしている。小さなものは市町村が扱っているが、財政的な理由により、十分には行われない。そこで、ハリッジ・ソサエティのような地域団体が小さなものの保全にあたっている。町の行政は、行政に提出された建築確認申請書を毎週ソサエティに送ってくる。ソサエティはそれを検討し、判断を行政に伝える。公聴会を通しても積極的に意見を出している。これにより、かなりの成果をあげているという。

懇談会に出席した、横浜洋館探偵団の嶋田昌子さん、舞岡水と緑の会の村橋克彦さん、保土ケ谷宿400倶楽部の近藤博昭さんらも、各々の団体の活動内容を紹介しあい、活発な意見交換が行われた。

市内の市民グループと懇談するA・ルター氏とS・シアード氏

昭和シェルビル姿を消す

くるくるとエントランスの回転ドアを回して、モダンなオフィスビルに入る。広い吹き抜けの事務室には、ガラス天井から明るい光がそそいでいる。当時このビルでは、こんな出勤風景が見られたのであろう。

この度、建物の老朽化から取り壊されることになった昭和シェル石油ビルのある山下町界わいは、かつての国際企業が集まる横浜のビジネスゾーンであり、昭和シェル石油の前身ライジングサン石油(後のシェル石油)も本社を置いていた。

昭和4年に竣工した当ビルは、旧エリスマン邸も手掛けたチェコの建築家アントニン・レーモンドの設計である。建築意匠上、正面玄関の円柱や回転ドア、内部事務室のガラス天井やドアなどに、モダニズムとアールデコ調の面影がよく残っており、特に内部事務室の広い空間とガラス天井は、共同設計者のフォイルエルシュタインが、パリ・アールデコ博に建てられたベレ設計による劇場を参考にしたという。

建替えにあたっては、所有者、横浜市及び学識経験者による委員会での検討を経て、歴史的・景観的な価値を継承していくため、外壁の復元保存を中心とした意匠的な保存を図ること等に関係者は努力するものとされた。機能性と経済性ばかり追求した再開発が進められる中で、人間性と物語性をもった保存計画が望まれる。

ありし日の昭和シェルビル

スワガーの設計したカトリック山手教会

現代史に翻弄された漂泊のチェコ人建築家――J.J.Svagr(スワガー)

日本の「シベリア出兵」がチェコ人建築家スワガーを横浜に運んで来た…。

彼の来日は、関東大震災が起こった大正12(1923)年。すでに日本で設計活動を始めていた同じチェコ出身の建築家レーモンドと上海で出会ったことによって日本へと赴き、レーモンドの事務所に加わる。

彼を日本へ手操り寄せたもの―それは第1次大戦前後から世界史の潮流に翻弄され続けたチェコスロヴァキアという国の哀しい運命による。当時オーストリアの支配下にあったチェコスロヴァキアは、独立前夜の複雑で不安定な政治情勢の中で第1次世界大戦に参加していた。折しもロシア革命が起こると、チェコ軍はボルシェビキへの投降を拒否してシベリアを占領しそこに留まった。それに乗じて日本を含む列強各国は、ロシア革命に干渉すべくチェコ軍救出を名目にシベリアへ出兵する。この時、日本はチェコ軍に軍事的援助を与え、7万人近くのチェコ兵士が日本を経由して帰国したのである。これを機に、日本とチェコは"近い国"となった。1920―30年代を通じて、日本におけるチェコへの関心は高い。

そして、スワガーもまた、このボルシェビキから逃れて上海へ来ていた一人であった。

彼はレーモンド事務所では構造を担当した。駆出しの日本人所員の給料が90円だった頃、彼は600円もらっていたという。レーモンドのスワガー評は、「大変真面目で勤勉だが、その構造設計は重くて入念過ぎた。それと言うのもあの地震の印象が強烈だったから。」というもの。

横浜では、彼はレーモンドの横浜事務所を統轄し、スタンダード石油ビルやライジング石油ビルなどの一連のレーモンドの建築の構造を担当しながらも、明るく軽やかなモダニズム建築を目指すレーモンドとは少々見解が異なっていたようだ。

やがて、レーモンドと袂を分かって独立。すでに地歩を築いていた横浜の山手に住んで、構造エンジニアからフリー・アーキテクトへの道を歩み、ミルミース邸やセントジョセフ・カレッチ講堂の他、外国人向け高級アパート、ヘルム・ハウスなどの作品を生み出した。その中で、彼の名を永遠に横浜に留める建築物は、天空に聳える尖塔を従えて山手の丘に立つ、ネオ・ゴシック風のカトリック山手教会であろう。

しかし、横浜が安住の地であったのも束の間、またしても現代史の波は彼を翻弄する。1940年頃、第2次世界大戦勃発により帰国。彼は、期せずして、戦前までの横浜の建築群像の中で、一際異彩を放っていた外国人アーキテクトの系譜にピリオドを打つ建築家となってしまった。

カトリック山手教会は、信者でもあったこの漂泊の建築家の魂を慰めるかのように、いまも緑の丘の上に厳かで美しいたたずまいを見せている。

(鈴木智恵子)

歴史的文化遺産保存に最善の努力を
――世田谷区からのアッピール

2月16日、世田谷区で「歴史的文化遺産の保存シンポジウム」が開催され、市民・所有者・研究者等約200人が参加し、歴史的建造物の保存をめぐり活発な意見交換がなされた。また、きびしい現実の課題もあるとの指摘もあり、しめくくりとして参加者一同が次のようなアッピールを採択した。

> 歴史的文化遺産の保存は、現代生活を豊かにし、新しい文化創造にとっても不可欠なことです。そのために、私たち市民は、貴重な文化遺産を後世に残すよう最善の努力をする義務があります。
>
> また、現行の法制度は、文化遺産の保存を極めて困難にしていることも事実です。私たちは、地域文化の継承、発展のため関係法令や税制などの改正、見直し、その他保存技法の支援等を国及び関係当局に強く望みます。
>
> 平成3年2月16日
> 世田谷区歴史的文化遺産の
> 保存シンポジウム参加者一同

函館で、住民による保存組織が発足

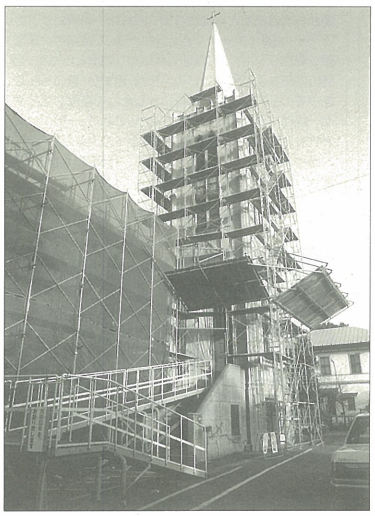
横浜と同じく幕末に開港した港町函館は、ハリストス正教会等数多くの洋館が残っている。これらが集積する末広町・元町一帯は伝統的建造物群保存地区に指定されているが、このほど地区内の市民等が自らの手で洋館群を守っていくための組織を結成した。「函館市伝統的建造物群保存会」(会長・渡辺恒三郎金森商船社長)と名付けられ、所有者の権利を守りながら、伝統的町並みの保存に取り組み、住みよい個性豊かな魅力ある町としての発展をめざすという。

関東学院大学建築学科 環境デザインクラス 1987～1991 学生作品展

期　間：1991年3月19日(火)～3月26日(火)
時　間：9：30AM～4：30PM
場　所：横浜山手元町公園内
　　エリスマン邸地下展示ホール
休館日：22日(金)、25日(月)

1990年度卒業制作作品を中心とした学生作品展示します。期間中の3月24日(日)には、シンポジウムを開催する予定です。

カトリック山手教会聖堂が外壁改修工事



山手三塔のひとつでもあるカトリック山手教会聖堂が、装いを新たにして将来にわたり、保全されていくことになりました。

昭和63年度に認定歴史的建造物となっていたカトリック山手教会では、同年度に実施した保全改修のための構造診断調査をもとに、改修方法等の計画を検討してきましたが、平成2年までにその実施を決め、この1月から着工しています。老朽化が目立っていた外壁の検査改修をしたうえで外装材を吹き付け直すことと、鉄製の窓サッシの新規取り替えを主な内容としています。

カトリック山手教会聖堂は、昭和8年チェコ人建築家J.J.スワガーの作になる、ゴシック風の教会です。開国後わが国初のキリスト教会であった横浜天主堂以来の歴史をもつ由緒ある同教会3代目の建物となっています。キリスト教の歴史だけでなく、横浜における外国人居留地の良好な住環境や文化摂取の様子を感じさせる外観をもっています。

昭和8年に施工した時と同様、地元の関工務店が改修工事にあたるのも歴史を感じさせます。

この保全改修工事に対し、横浜市はその費用の一部3000万円を助成します。

中国の文化財研究第一人者・羅哲文氏横浜市を訪問

平成2年秋、中国国家政治協商委員・中国文物研究所所長の羅哲文氏夫妻が東アジア建築文化研究会の招きで来日。10月19日、20日の2日間にわたって横浜に滞在、市内の代表的な建造物を視察しました。氏は中国文化部国家文物局局長などを歴任、万里の長城の保存を始めとして多くの中国の文化財の保存を手掛けてきており、国内外に多くの知己をもつことで知られています。

19日、片桐正夫日大助教授らとともに市庁舎に到着した夫妻はその足で都市計画局都市デザイン室に来訪、横浜での「歴史を生かしたまちづくり」について説明を受けました。その後市職員とともに、港の見える丘公園、エリスマン邸、生糸検査所、赤レンガ倉庫などの関内・山手地区の洋館を見てまわった氏は、文化財の保存を含んだ都市計画が必要であることを強調。翌20日は2年度に指定文化財となった中区大芝台の地蔵王廟と市内の代表的な日本建築群がある本牧三溪園を訪問。特に中国様式をとり入れた地蔵王廟では、同行した本市の文化財保護審議会委員の稲葉和也東海大学助教授との間で活発な意見の交換があり、今後の同廟の学術調査や保存事業が前進するものと期待されます。

地蔵王廟を調査する羅哲文氏

1号ドックの全貌が現れる

明治中期に建造された旧横浜船渠第1号ドックは、横浜を代表する歴史的資産です。現在周辺は、日本丸メモリアルパークとして整備され、ドックには船籍を有したまま帆船日本丸が係留され、市民の憩いの場となっています。この1号ドックがこのほど昭和60年のオープン以来6年ぶりに水を抜いて、検査と清掃を行うこととなり、その巨大な全貌を現しました。

1号ドックの設計は、当初英国人ヘンリー・スペンサー・パーマーが行っていましたが、途中で死亡。当時日本でドック築造の専門家だった海軍技師恒川柳作が引き継ぎ、実施設計と総監督を手がけました。

明治29年7月着工、同31年竣工、同32年5月開渠で、工事費は34万3641円。当時はそば一杯が1銭8厘でした。

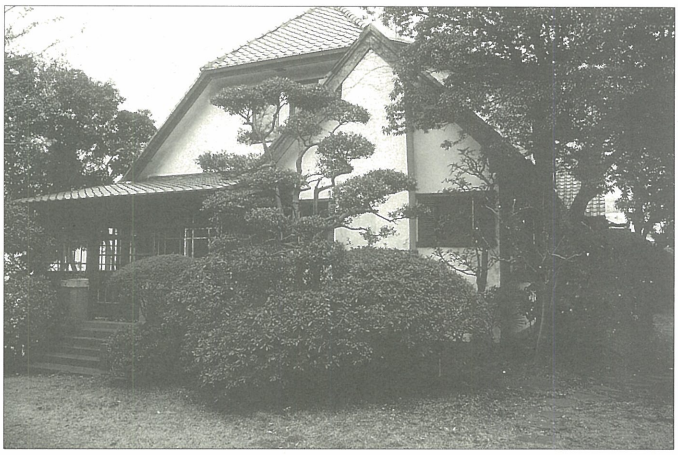
規模は延長162メートル（大正7年8月110フィート延長し、現在の196メートルにとなりました）、最大幅34メートル、深さ10メートル、当時東洋最大のドックでした。

ドックは安山岩（相州堅石）を35000個も積み上げてできており、関東大震災にもビクともしませんでした。ギリシャ・ローマ建築のコロシアムをほうふつとさせる、凹状の大規模石造構造物であり、長大なスケール感と非日常的な石造空間として、類いまれな土木構造物と言えます。横浜市では、この水抜き期間に、これまで出来なかった部分の測量等の調査を実施し、今後の保全活用に役立てていくことになりました。

6年に1度の水抜き作業中の第1号ドック

山手214番館を認定、認定歴史的建造物は9棟に
さらに古民家2棟を予定

横浜市では、市内の歴史的建造物等の保全と活用を図っていくため、昭和63年度から「歴史を生かしたまちづくり要綱」をスタートさせました。この要綱は、横浜市独自の制度として、歴史的建造物等の景観的価値に着目して、これをまちづくりに生かしていこうとするものです。これまでに日本火災横浜ビルを第1号に、合計8棟の歴史的建造物の認定を行ってきました。平成2年12月には、新たに「山手214番館」を加え9棟になり、さらに平成3年春のうちに2棟が認定へ向け、手続きを進めています。



◉山手214番館（中区山手町214）

設計者、竣功年共に不詳。関東大震災の後、昭和初期までに建てられた大型で本格的な外国人住宅。広い敷地に余裕をもって建てられており、居留地時代における外国人のゆとりある住まいかたをうかがわせます。戦前からスウエーデン系企業が所有しており、かつてスウエーデン領事館であったという興味深い伝承を裏付けています。袴腰屋根に赤瓦が葺かれ、外観の全体に伝統的な様式が踏襲されていることから、山手にふさわしい風格のある景観を呈しているものです。現在は隣接する横浜共立学園の所有となっています。同学園では本校舎が既に横浜市指定文化財であり、現在進行中の新校舎建設完了後の課題として、山手214番館の活用策を検討しています。

鶴見区の古民家2棟が認定へ

要綱発足以来「認定歴史的建造物」と言えば近代洋風建築系統ばかりでしたが、鶴見区馬場にあるひとつの谷戸で2件の古民家が、平成3年3月の認定へ向け動き出しています。（この2棟の説明は4ページに掲載）

◉澤野家長屋門（通称・馬場の赤門）

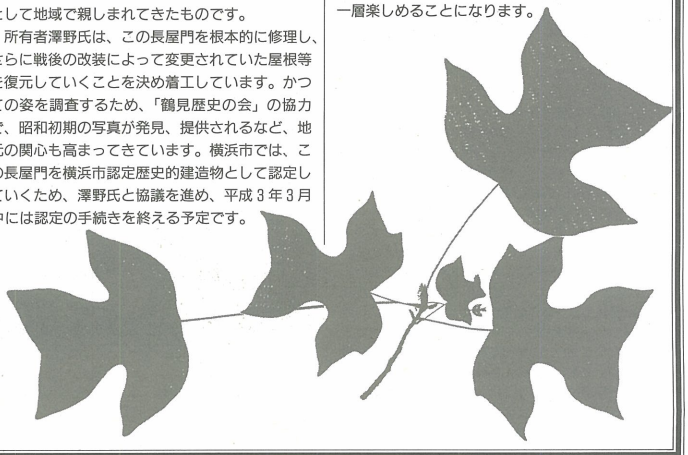
この長屋門は、近郷4カ村の総代名主を務めた澤野家の家格を示すものとして江戸時代末期の安政年間（約130年前）に建築され、幕府から特別に赤く塗ることを許され、それ以来「馬場の赤門」として地域で親しまれてきたものです。

所有者澤野氏は、この長屋門を根本的に修理し、さらに戦後の改装によって変更されていた屋根等を復元していくことを決め着工しています。かつての姿を調査するため、「鶴見歴史の会」の協力で、昭和初期の写真が発見、提供されるなど、地元の関心も高まってきています。横浜市では、この長屋門を横浜市認定歴史的建造物として認定していくため、澤野氏と協議を進め、平成3年3月中には認定の手続きを終える予定です。

◉藤本辰雄家住宅主屋

澤野家長屋門から谷戸の奥に入り、つきあたった場所にあるのが藤本辰雄家です。約20,000㎡にも及ぶ広い敷地は菖蒲園として整備され、見事な農村的景観を呈しています。その様子は本紙第5号でお知らせしていますが、このほど東海大学の稲葉和也助教授らによる調査や所有者との話しあいにより、主屋の認定等保全への取り組みが進行しつつあります。

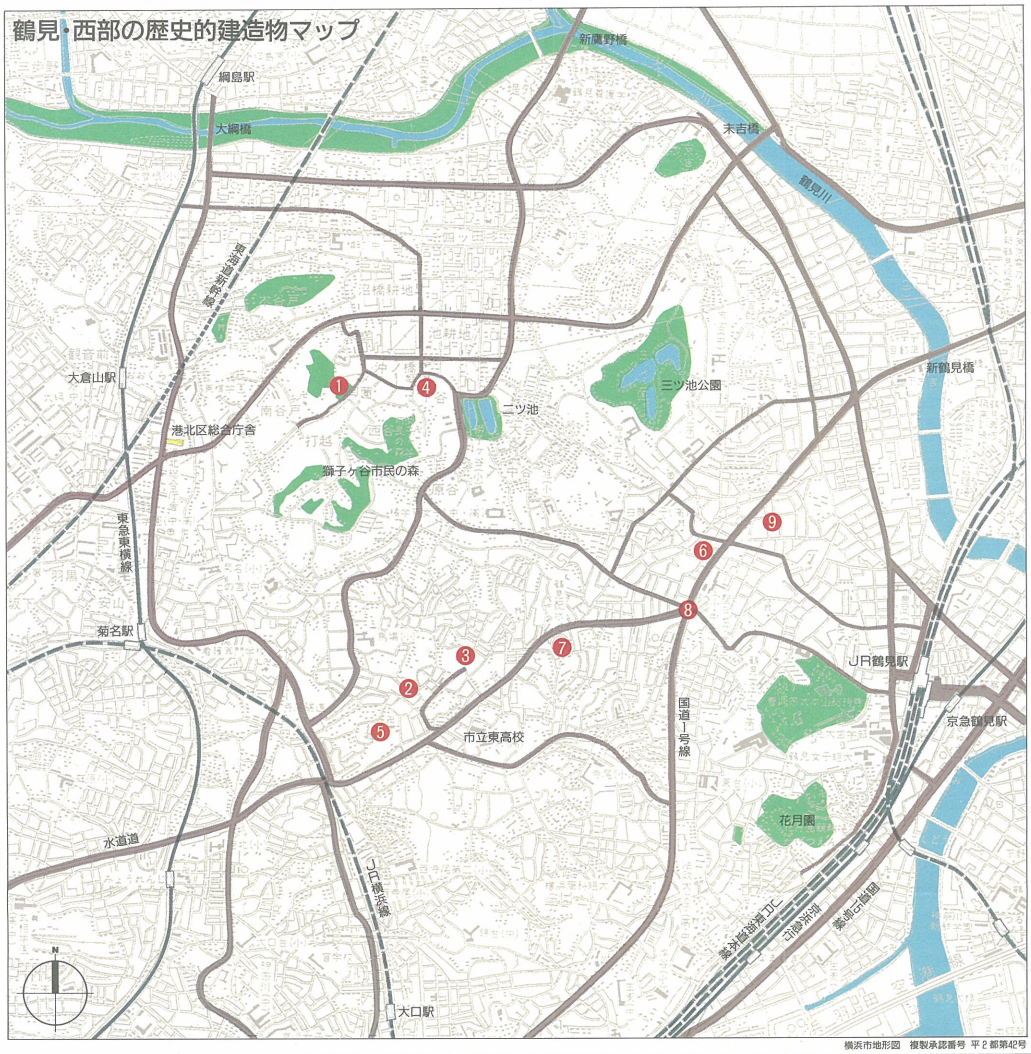
藤本家では従来からボタンとショウブの季節（4～6月）には、有料で一般公開しており、これからも花と緑に囲まれた草葺き民家の風情がより一層楽しめることになります。



横溝屋敷とその周辺

横浜の歴史を語るとき、郊外に残る農村の風景やたたずまいを忘れてはならない。開港の地や東海道の宿場町としての発展の歴史とともに、横浜を支えてきた農耕や養蚕が、現在の都市の形態や環境にあたえてきた影響は大きいのである。しかし、近年の都市化によって、こうした歴史的環境は急速に失なわれてしまった。

ここでは、市内に残る106棟の茅葺き民家や長屋門の中でも、市街化の進んだ地域に残されたものを取り上げてみる。鶴見の西部地域、獅子ヶ谷や馬場のあたりにおいて、周辺の市街化のなかで、わずかに今日も歴史を伝えているものである。



横浜市地形図　複製承認番号　平2都第42号

主屋

長屋門

文庫蔵

❶横溝屋敷（横浜市農村生活館） 鶴見区獅子ヶ谷町335

横浜市北部を蛇行して流れる鶴見川が、港北区と鶴見区とで接する辺りで南岸域に大きく張り出した沖積低地――。旧横溝家住宅は、かつては水田地帯であったこの獅子ヶ谷の地で、慶長年間（16世紀末）から名主を務めていた家の屋敷地に建つ民家である。その建築年代は江戸時代末期から明治時代中期に至るもので、主屋、表門、穀蔵、文庫蔵、蚕小屋の5棟を有している。

この地の字名が御薗（ミソネ）と称されることでも解るように、背後に山林を背負い、前面にはかつての水田地帯が広がる最良の地に、この住宅は建っている。その景観は今でも健在で、背後の山林は市民の森として担保されているし、かつては水田であった屋敷前面に広がる農地は、市街化調整区域となっている。しかし、そうした環境も黙っていていつまでも維持されているとはいえない。徐々にではあるが、周辺農地の景観が変わってきているのも事実である。

この旧横溝家住宅のように、その民家の出自を明らかにできる歴史的な風土の中に存在し続けることは、この民家にとっても、横浜市民にとっても極めて幸福な保存方法であるといえる。そのおかげで例えば、明治29年に建築が始まった総2階建ての豪壮な主屋には、囲炉裏がなくなっていることや、2階から上を養蚕のための施設とし、棟には櫓がのっていること等について、生糸輸出港としての横浜港との関係や、この時代のこの地域の特性として、即座に知ることができるのである。

また、建築物だけではなく、横溝家が所有していた民俗資料や、古い時代の地方文書も豊富に残されており、ここを訪れればそうした資料にも接することができる。

四季折々に移ろう季節の変化の中で、地域にお住まいの方々のご協力により、この地帯の農村で伝えられている年中行事なども市民参加の下で、定期的に開催されている。こうした優れた文化財的価値を有する旧横溝家住宅は、昭和63年11月横浜市の第1号の指定文化財となり、横浜市農村生活館「獅子ヶ谷横溝屋敷」という名称で公開されている。

❷澤野家長屋門（赤門） 鶴見区馬場2-23-15

澤野家は、馬場の旧家であり、江戸末期、安政2年（1855年）には周辺四カ村の総代名主を務め、名字帯刀をも許された。現在、屋敷地に残され、往時をしのぶものは長屋門だけとなった。紅殻で朱色に塗られたことから「馬場の赤門」として、長く付近の人々に親しまれてきた。赤門とは、江戸時代祝い事などで特別の家だけが塗ることを許されたものである。

横浜の長屋門は、現在ではその数も少なくなり、文化財として、また地域の貴重なまちづくりの資産として意味をもっている。この赤門は安政2年に建てられたと伝えられている。戦前の改修や老朽化により姿を変えているが、当主の澤野豊氏や子息の久幸さんが、この保存を強く希望し、この度、保全改修事業が行われることになった。

幸いにも、鶴見歴史の会の協力により、昭和4年頃の写真が見つかり、これと東海大学の稲葉和也助教授の監修によって、極力創建時の姿に復元することとなった。また、横浜市の歴史を生かしたまちづくり要綱による「認定歴史的建造物」となり、改修助成を受ける予定でもある。今年の春には、修復された姿を見ることができ、さらに澤野さんのご好意と歴史の会や付近の方々、区役所の協力によって、内部の公開も検討されている。

❸藤本達雄家 鶴見区馬場2-17-6

赤門から歩いてすぐの、谷戸の最も奥まったところに、藤本家旧主屋がある。昭和19年に、福沢諭吉の孫駒吉（前号で紹介した「旧福沢別荘の部材保存」の建て主）の紹介により、藤本家が購入したものである。

この古民家は、港北区篠原町より明治39年に当地へ移築されたものというが、当初の建築年代は、江戸末期から明治初期と推定される。内部は、南側にザシキとデイ、北側にチャノマとナンドが並ぶ、典型的な整型四ツ間取りであり、大黒柱や高い差し鴨居とともに、当時の面影をよく残している。また、建物は、裏山そしてかつての谷戸田やわき水をいかした、花菖蒲や牡丹園と一体となった景観に特色がある。これは、一般に公開されており、春から初夏にはたくさんの人々が訪れる。

当主の藤本さんの手入れもよく、付属屋（現在の茶室）とともに、歴史的な景観を伝えている。

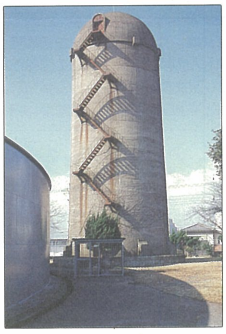
❹神明社 鶴見区獅子ヶ谷町698

❺建功寺 鶴見区馬場1-2-1

宝暦7年（1757年）建築といわれ、改変もあるが軸組は当初のものであり、周辺とともに歴史的環境を留めている。

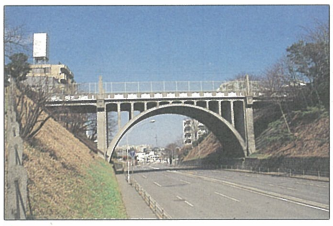
❻旧清水正次邸（レストラン「陽のあたる坂道」） 鶴見区北寺尾2-1-31

昭和8年建築、設計清水正次。スペインのヴィラ（別荘）風の住宅。



❼鶴見配水池（水道施設） 鶴見区馬場3丁目

昭和12年建築、高さ25.94m、総水量1283㎥の配水塔。水道道沿いにあり、この周辺にとっての ランドマーク（景観的な目じるし）となっている。



❽響橋 鶴見区東寺尾・北寺尾・東寺尾中台・東寺尾北台

昭和16年建設。国道1号線にかかる鉄筋コンクリートの軽快なアーチ橋で、「眼鏡橋」として親しまれている。

❾三井造船鶴見寮 鶴見区諏訪坂町7-26

大正時代の建築といわれ、当初は旧乾汽船社長の別邸として建てられた。